

「手紙」 ～ 願 い ～

私 前略 専門職の皆さんへ
88歳、男、アウルで生活して5年が経つ。これは、私の叫びというか、世の中に言いたい願いでもある。私は、ゴミを集めるのが使命？というか、あんた方介護する人の間では「収集癖」と言うやっかいな事のようにだが、私にとっては趣味というよりリサイクル活動のようなものである。そんな集めたゴミを勝手に捨てられてしまえば、誰だって嫌な気持ちになる。ちょっと怒ったら、あんた方は「暴言」だの、「暴力行為」だのと言う。今回は、そんな趣味が高じてもの作りに発展していった話を、家（うち）の社長を通してお伝えしてもらうことにした。

一般的に世間では私のような年寄りを「ボケ」老人という。専門的には「認知症高齢者」って言うみたいだ。しかし、私は叫びたい。そんなボケ老人にしたのは、あんた方介護をする人ではないか。社長にもよく言う。私達にだって考える力はある。感じる力だって、行動力だってある。それを、全部あんた方、介護をする人がやってしまう。年寄りを大事にするということを、あんた方は履き違えている。大事にするということは、何でもかんでもやってあげることじゃない。人間樂を覚えるとそれに慣れてしまうものである。それは、私達の弱さでもある。それは認める。ましてや年寄りだ。そんな機会を奪わないで欲しい。私は、昔ブリキ職人として働いた。自転車屋もやった。自転車の修理の手際のよさを気に入られて、国鉄でも働いた。退職して、町内会の仕事をした。在家の坊主もやってる。今でも葬式でお経も読む。なんでも自分にできることはしてきた。でも、年を取ってくると記憶が定まらなくなってしまうことが、度々起きようになった。心臓もいいほうじゃない。フランドルテープって言うのを貼っている。目も片方はほとんど見えない。世間で言う、身体障害者だ。手帳もある。それが、ある日突然「ボケ」だと言われて見れ、びっくり仰

天だ。それでも、自分でしたいという願望は今でもなくなるらない。社長が、ブリキ職人だった頃の道具を持ってこいと言うので、部屋に持ち込ませてもらった。その道具を使って、あらゆる物を創作した。もちろん、ゴミでだ。今日は、その一例を紹介する。社長にはいつも言っている。全国に広めて欲しいと。こんなにできる年寄りも、日本には五万といることを。伝えて欲しい。私達にできることを奪わないで欲しい。伝えて欲しい。私達にも感じる力はあることを。伝えて欲しい。私達にも、行動力があることを。できれば、あなた方の専門性を、そのことに生かせるよう研究して欲しい。いつかあなた方もそこにたどり着くだろうから。

お手紙読んでいただいて、ありがとうございます。皆さんも御身体ご自愛下さいませ。

この手紙は、ご本人と協同で考え執筆したものです。内容及び発表することについては、本人の同意を得ています。彼は、平成21年2月2日、91歳、ご家族に見守られながらホスピスにて永眠されました。彼は脳血管性の認知症でしたが、中核となる症状への支援だけで、ほとんど認知症状の進行もなく、彼らしく命を全うされました。主体性の原則、選択性の原則、関係性の原則を基本にこれまで実践してきたひとつの命のつむぎ方だと思っています。彼との関係を通して、あらためて『人となり』をどのように見出せるのかということを解れば、『認知症』に右往左往することなく差別感情に左右されず敬意あるまたは尊厳ある態度と対話をもって存在できることに確信をもつようになりました。これからも、私の哲学として『人となり』を大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。 感謝

一般社団法人北海道認知症グループホーム協会
会長 宮崎直人

「わかる」から「分かる」そして「和かる」へ

私たちは目標や理念や背景が共通していると感じた時、お互いに「わかる」境地になれるような気がする。それ以外るとき、お互いの目的や目標が一致していないときには、お互いに詰め寄ったり、譲り合ったり、受け止め合ったり、認め合ったり、落としどころを探ったりする。つまりお互いが「わかる」には自分の受け止め方や考え方を変えてみる必要がある。「わかる」を並べ替えて（変えて）みると「かわる」ということばになる。「わかる」とは、つまり「かわる」ことなのかも知れない。「わかる」は過去の自分と「分かる」ことなのかな。「分かる」たびに、私たちはかつての自分とサヨナラして新しい自分に出会っていくのだ。そして新しい自分に出会った分、お互いに和してゆく「和かる」って、素敵ですね。

編集後記とさせていただきます。 小原陽一

大空と希望



No 10

一般社団法人北海道認知症グループホーム協会
広報誌「大空と希望」 2014年8月発行
〒060-0001
札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル3F
TEL:(011)208-3320 FAX:(011)204-7312
URL http://h-gh.net

「地域包括ケアシステムにおける グループホームの役割」

来

2000年に施行された介護保険制度も年(2015年)4月で15年目を迎え、第6期計画が始まろうとしています。社会保障制度創設から50年。これまで厚生労働省を中心に新たな制度改革が行われてきました。財務省・厚生省は予測された少子超高齢社会(2025年)に対応するため、1980年代から社会保障制度改革を進め、1989年(平成元年)在宅医療・介護への転換・移行(ゴールドプラン・公的介護制度創設・財政規律等)を進め、当初予定された大改革は①財務規律(プライマリーバランス)は2011年から ②社会保障制度大改革(療養病床再編)は2012年からとされていましたが、いずれも先送りされました。もはや国は「増税」「制度圧縮」「窓口負担増」を繰り返すばかりで、もはや打つ手がなく手遅れな状態。行政主導の施策に振り回されるリスクは国民と事業者の両社にとって大きいと指摘する声もあります。また、生産年齢(労働人口)の減少や有効求人倍率の急激な増加等など、昨今の我々事業者を取り巻く環境の変化は著しく、2018年の医療と介護のダブル改正についても大改革が予想されています。今一度、我々事業者が今後なすべき事は何かについて考える必要があるのではないのでしょうか。以下に全国で御活躍されている「一般社団法人 地域ケア総合研究所 所長 竹重俊文氏」より御寄稿を頂きました。2025年に向けた地域包括ケアシステムにおけるグループホームの役割

2012年9月のオレンジプラン及び2013年8月の社会保障制度改革国民会議の報告(医療と介護の一体化:病院完結型から地域完結型)を受けて、社会保障審議会介護保険部会で医療と介護の一体改革に向けた議論がなされ、2014年6月医療介護推進法案(医療保険:地域における効率的かつ効果的な医療提供体制の確保、介護保険:地域包括ケアシステムの構築と負担の公平)が国会を通過しました。

I : オレンジプランにおける役割

認知症の方を住み慣れた地域において支援する拠点！ の場①相談窓口②地域生活支援・地

域支援＝地域・生活支援コーディネーター(仮称)育成！ 1、認知症ケアの地域支援施設への自覚と対応＊相談窓口設置(看板、旗など住民に判りやすく！)＊サロン・カフェなど地域住民の居場所づくり＊生活支援サービス(配食・移送等・電球交換等)への対応・支援＊社会参加支援:サロン等での役割(出番)の確保○地域生活支援コーディネーター(仮称)の育成・設置 2、職員の専門職配置:介護福祉士・実践者研修等受講相談・介護等の知識や技術及びマネジメント・コーディネーター等の職員配置 「感性」豊かな人材育成をめざす。

II : 地域連携・協働・統合への取り組みと役割～地域ごとに病院・在宅医療・介護事業・住まい系・生活支援系事業者の集まる場づくり～

～集まり・知恵を持ち寄り・出来ることから始める:音頭を取るのは誰？～地域住民・役所のニーズは、事業者間の連携・協働・統合(病院・施設・地域において365日24時間支援体制の構築)です。多様なサービス事業者(賛同者)で集まり、住民・地域目線で事業展開を！ 通称「ひざ懇」を始めましょう！ 小樽ではGH事業者が中心に5月から始まりました！

III : 今後の制度改革・報酬改定の方角全てのサービスが差別化されます！ さてグループホームの差別化とは？ 各種サービスのあり方検討会等実態調査が2012年度から行われ、その中でグループホームのあり方も2カ年の議論の報告書が提出されました。①ケアの状況②職員体制やスキル・育成③今後評価すべき機能・類型＊類型化 A群:制度創設時から「個別ケア」の理念を遵守し、適切に運営する事業所群 B群:A群に加えてADLの重度化にも対応し、看取りまで支援する事業所群

○経営者・管理者及び職員が2025年に向けた地域包括ケアシステムにおけるグループホームの役割を共有し、地域に根ざした事業を明記して「何を・誰が・いつまでに」改善するのかを明確にして大きな改革に向かって準備して行きましょう。

○認知症対応型共同生活介護のあり方に関する調査研究事業(結果概要)

www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai.../0000041753.pdf

を御参照下さい。

平成26年度事例研究大会in苫小牧 開催

「あなたが認知症になったとき・・・」

～認知症になっても大丈夫な地域になるためには～

26年度事例研究大会in苫小牧
「あなたが認知症になったとき・・・」
～認知症になっても大丈夫な地域になるためには～

認知症の人のニュースが毎日新聞にとりあげられたり、徘徊等で行方不明の人が多くなっています。小さなホームでの発見が事例発表により大きな気づきとなる。そんな事例研究大会にしようと準備しております。

認知症グループホームがその地域にあることによって何ができるかが求められる時代です。それが地



域密着型サービスへの期待値なのです。2000年にスタートしたグループホームも北海道だけでも930事業所となりました。9月14日の交流会ではおおいに語り連携の輪を広げましょう。

＜交流会＞ 日時 26年9月14日
18:00～20:00
場所 グランドホテルニュー王子
2F芙蓉の間
苫小牧市表町4丁目3-1
TEL:0144-31-3120
会費 5000円

＜事例発表会＞
日時 26年9月15日
(9時30分開場) 10:00～15:00
場所 苫小牧市文化交流センター
(アイビープラザ) 多目的ホール他
苫小牧市本町1丁目6-1、
TEL:0144-33-8131
参加料 無料

日胆ブロック一同心からお待ちしております。
大会実行委員長 下川孝志

十勝ブロックの取り組み

ケアスタッフ質の向上に努める 研修、事例検討、防災、地域連携

十勝は、1市19ヶ町村で構成しています。管内の総人口は、352,281人、年齢別人口では、平成13年には15.1%だった14歳以下が、平成23年には13.2%と減少する一方、65歳以上は18.7%から24.7%と年々増加し、少子高齢化が進行しています。そのような地域特性がある十勝において活動している私たち北海道認知症グループホーム協会加入事業所は十勝に16事業所あります。同地区で「十勝高齢者グループホーム協議会」と連携し、様々な研修を企画・実施していきながら地域活動を行なっているところです。前年度には道GH協会十勝ブロック主催にて帯広で「認知症実践者・管理者研修」も実施し、十勝管内のケアスタッフ質向上にも努めています。更に、平成25年度「みんなで考える認知症北海道IN旭川」にて、十勝からグループホーム鶴栖さんが「笑顔への外出」と題して事例発表を行なってきました。その中で、外出を大きく3項目に分類（日常外出・小外出・大外出）に分けて外出支援

に取り組み、それによって利用者様の表情が明るくなった事や会話がなくなった事。外出を通して地域との関わりも広がりが出てきたという事でした。現在は防災についても積極的に取り組んでおり、道GH協会にも発電機の導入をご相談させていただくなど、災害時に地域との連携だけではなく、道GH協会と十勝GH各事業所が被災を共に検討できるよう働きかけを行なっています。7月15日には道GH協会十勝ブロック主催にて「GH計画作成担当者研修会」と題し、GH花緑 総合施設長 釜谷 薫氏を帯広にお招きして研修を行いました。参加定員50名予定の所、ご好評につき十勝管内58名の参加があり、とても有意義な研修でした。アンケート集計でも「業務やスタッフの困り事ではなく、本人の思いや視点に立つ意味が深まった」等の意見が聞かれました。今後も研修を通してケアスタッフの質の向上が利用者様やそのご家族、更に地域との関わりの輪を広げていけたらと思っています。

リスクマネジメントセミナー

「リスクは軽減できる」

訴訟、裁判、賠償・・・恐ろしい言葉ながらも、どこかで他人事のように考えている自分もいましたが今回佐々木氏のお話を聞くことで、多くの改善点とその時に備える必要性に気付かされました。平成26年7月16日、グループホーム協会オホーツクブロックにおいて、会員を対象とした『リスクマネジメントセミナー』を開催しました。講師には、札幌市の保険会社『オフィスブレイン』の代表取締役、佐々木厚史様にお越し頂き、介護現場で起こり得る事故等のリスク、またそこから派生するご家族からの訴訟やその損害賠償等についてお話し頂きました。今回のセミナーの依頼のきっかけとなったのが、今年3月に開催された北海道グループホーム協会総会での佐々木氏の1時間の基礎講演を受けたブロック役員たちの意見でした。感想は『時間が少ない』『もっと聞きたい』という事、そして事故や訴訟といった事は、非常に身近な問題でありながら自分たちはあまりにも知らなすぎるという思いでし



た。また佐々木氏ご自身も『1時間では全然足りないのですが・・・』と話されていたので、再度時間等の調整を図り北見市での開催をして頂きました。セミナーに参加した介護職員たちは終始真剣な表情でした。中でも、過失の如何に依らずその時いた介護職員「個人」が数百万円の損害の対象となった事例においてはやり切れない思いもありました。しかしこういった事が起こり得ると理解し、契約書ともなるケアプランに安易な表現はしない事、記録においても普段やっていることを意図的に残すという事等が続ければそのリスクは軽減できるという事も分かりました。また、出来る限りキーパーソンの方はもちろん、親戚等を含めたご家族との関わり合いをより密にしていくことが重要である事も再確認することが出来ました。そしてこの事によりもっと質の高いケアにつながっていくのだろうと感じました。今回の研修はグループホーム協会の支援金を受け、無料という形で開催することが出来ました。関係者や研修準備・調整を行なったブロック役員、そして遠方よりわざわざお越し下さった佐々木氏らに多くの感謝をしたいと思います。今後もこういった研修等の機会を増やし少しずつでもホームの質を、そして地域をより発展させていきたいと思っています。

オホーツクブロック 事務局 菊池進

認知症家族の会との懇談会

広報誌や集会を通して啓発、急の時は介護保険課へ

昨年9月に老施協の高橋会長と当時道東ブロックの会長である私が釧路市の認知症家族の会に呼ばれ懇談会が行われました。会場には30人ほどの会員が集い、はじめてでしたので、皆さんこれからどういいう話があるのかと興味深々という雰囲気の中で始まりました。最初は認知症一般の事で穏やかに、話が進みました。昔の認知症ケアの対応として、徘徊の事が話され、70代の男性が発言しました。「歩き疲れたら、休むのだからずっと歩かせておけばいいのでないのか？ 円形のぐるぐる回って歩ける廊下を作ったらいいのに？」 私は答えました。「以前は特養で回廊式の廊下ということで脚光を浴びておりましたが、今は逆に決している対応とは評価されていません。徘徊する人は無目的に徘徊することはありません。必ず一人ひとりの目的、思いを持って歩いております。現在は回廊式の廊下はなくなりつつあります。」その人は少し驚いたようでした。次の質問者はきつい調子で話しました。ある施設にお母さんと面談に行きました。GHか特養かは話されませんでした。その施設の対応した人はこう言ったそうです。「こんなに徘徊がある人なんか、どこの施設にも入れない」質問者は憤懣やるせない顔をし

ながら、悲しそうに「帰り車に母を乗せながら、絶望の淵に落とされ、そのまま海に突っ込みたくなりました。」高橋会長は徘徊の人を対応するとすると、その人一人にひとりの介護員をつけなければならず経営上難しいといわれました。私はもしGHの職員がそういう事を言ったとしたら誠に申し訳ありませんと謝り、自分のホームの話をしました。基本的にはGHは日中の施設はしておらず、夕方夜勤の職員が黙ってホームを出てきた利用者とはばったり会い事なきを得た話とか、徘徊する利用者と一緒に職員が歩くことはよくあることですが、その際タクシーを止めて乗り込む人に対しては、乗客が少なくようやくお客を見つけたと思っている運転手とやりあうのは辛い経験だったなどと話しました。徘徊の人が入所できないとは認知症対応型共同生活介護としては絶対言ってはいけないことです。GH協会は強制力のある組織ではないので、指導・命令は出来ませんが、ブロックの広報誌や集会等を利用して啓発に心掛けます。直接すぐ対応して欲しい時は是非市役所の介護保険課に相談してくださいと話を終えました。

道東ブロック 斎藤裕

実践者、管理者、実践リーダー研修 日程と開催都市(予定)

認知症介護実践研修 (実践者研修)

第1回(札幌市) 終了
平成26年5月27日～30日及び6月19日
第2回(苫小牧市) 終了
平成26年6月24日～27日及び7月17日
第3回(旭川市) 終了
平成26年7月22日～25日及び8月18日

認知症対応型サービス 管理者研修

第1回(札幌市) 終了
平成26年6月19日～20日
第2回(苫小牧市) 終了
平成26年7月17日～18日
第3回(旭川市) 終了
平成26年8月18日～19日

認知症介護実践研修(実践リーダー研修)

第1回(函館市) 終了
第1週目平成26年5月12日～5月16日
第2週目平成26年5月19日～5月23日
報告まとめ平成26年6月30日
第2回(苫小牧市)
第1週目平成26年8月25日～8月29日
第2週目平成26年9月8日～9月12日
報告まとめ平成26年10月27日
第3回(旭川市)
第1週目平成26年9月29日～10月3日
第2週目平成26年10月6日～10月10日
報告まとめ平成26年11月17日

第4回(札幌市)
第1週目平成26年10月20日～10月24日
第2週目平成26年11月3日～11月7日
報告まとめ平成26年12月15日



日程等変更になる場合がございます。詳しくはHPをご覧ください。

その他の研修 日程と開催都市(予定)

スタッフ研修(札幌市) 延期
和田行男氏
平成26年7月11日→未定
**潜在力を引き出す介助/拘縮予防の
アプローチ研修(札幌市)**
田中義行氏
平成26年11月28日(金)

計画作成担当者研修(札幌市)
平成27年1月16日(金)



第一回オレンジRUN 旭川を一周 つながりを大切に、様々な方々との連携を目指す

第1回オレンジRUN!! 旭川
～あなたの笑顔と共に～ 開催「つながり」を実感!! 認知症を含めて、どんな状態になっても暮らし続けられる「まちづくり」を目指すことが各地域で広がっています。道北ブロックも活動理念の中に、各理事一人ひとりのネットワークを活用し、垣根を越えた顔の見える「つながり」を強化すべく自ら行動し地域支援、人への支援をブロック全体の専門職同志が感じ合うことが不可欠と思っています。その活動のひとつとして「認知症ならびに、高齢者、障がい者、その垣根を越えた人への支援を目的に介護、医療、地域活動に従事している者が連携・連帯を一本のタスキに想いを込めて、旭川を認知症支援のシンボルカラーであるオレンジ色をつないでいきます」を大会目的に6月27日(金)広い旭川を一周しました。オレンジ色のTシャツと旭川イメージキャラクター「あさっぴー」が笑顔で走りぬけました。実行委員、大会支援者が



日増しに増えてゆき当日はグループホームだけではなく、病院、医師、ディサービス、包括支援センター、障がい者施設、認知症ご本人、ご家族、住民有志が35Km、30名以上の方々に「たすき」をつなげることができました。拠点、拠点ではお年寄りや、子供達がランナーやあさっぴーを笑顔で迎えてくださりハイタッチでの笑顔や応援の言葉はかけがえのない「つながり」の共有でした。多職種、多領域からのアプローチが必要な仕事に携わっている私達ですが、今後もグループホームはもちろん「つながり」を大切に活動や、様々な方々との連携を目指す道北ブロックである事が未来のグループホームの地域での可能性の多き在り方だろうと信じています。各理事一人ひとり自覚と行動をもって関心を寄せ合える取り組みに努めてゆきます。道北ブロック 西塔 昭代



ラムネ
母はラムネの栓を
ポンと要領よく抜いて
泡が噴き出すラムネの瓶を
手渡してくれた。
知識をいっぱい身につけて
大人になってから
いいことがある
といていたのは母だった。
知識から
生まれてくるのは
不安だけじゃないか。
何の役にもたはしないぞ
母さん
知識なんて。
ラムネを飲み干して
空になったラムネを瓶を
すかして空を見た。
「お母さん、瓶に青い空が入ったよ」
と幼い私は言った。
今、記憶も何も入っていない
空っぽの母をすかして
この私がしっかりと見えている。
瓶の色で微妙に変わった
幼いときの空の青色を思い出す。

引用著書「まなざしがいこ」
著者 詩人 藤川幸之助
(中央法規)



RUN 伴 北海道エリアを駆け抜ける

人の繋がりの可能性を広げて

『RUN伴TOMO－RROW2014』

今年もRUN伴TOMO－RROW（通称：RUN伴）が始まりました。当協会も全面的に応援をしており、各地では会員GHの皆さんや当事者の方、地域の方など沢山の方々がランナーやサポーターとして参加されております。今年は、帯広から広島までの約2500kmを、およそ2000人の



方々が襷をつなぎます。このRUN伴は、当協会外部理事であります井出 訓氏が理事長を務める「認知症フレンドシップクラブ（DFC）」が主催し、認知症の人や家族の思いを知ってもらい、多くの人が関わっていける地域づくりを目指し、認知症の人と家族、支援者たちで1つの襷をつなぎ走るイベントです。

主旨は以下ようになっております。

①私たちが暮らす地域の中には支えを必要としている認知症の人、その家族がたくさんいるということ、同じ地域に暮らす人達に知ってもらうこと。

②地域に暮らしている認知症の人やご家族にも、暮らしている地域の中にはたくさんの仲間たちがいて、力を貸してくれるということを知ってもらうこと。

③認知症になっても安心して暮らしていける町とはいったいどんな町なのかを、すこしでも多くの人たちに考えてもらうこと。（認知症フレンドシップクラブHPより抜粋）

この主旨に賛同し、伴に人を支えるために、全国のたくさんの方々が参加されてます。

北海道エリアは、北北海道（帯広～札幌）7月12

日～14日、南北海道（札幌～函館）7月25日～27日に開催されました。北北海道は今年初めての参加地域にもかかわらず、多くの参加者がおり、早朝のスタートに帯広市長も駆けつけてくれました。途中大雨にも見舞われながらも当事者を含めた多くのランナーやサポーターがその想いを繋ぎ、ゴールでは札幌栄和会の瀬戸施設長がアンカーを務められました。南北海道は、4年目の地域で構成されているおかげか、それぞれの地域で下地作りが行われており、子供から当事者の方までの多くの参加はもとより、市長や町長などの参加も多く、行政も巻き込んだ活動へと成長してきています。RUN伴2014は、まだ始まったばかりで10月26日の広島でのゴールまで、長い道のりが待っております。天候などの不安はございますが、絶対に繋がると信じております。過去の3年間での急成長と実績は、人と人との繋がりを確信させるものであり、1人では成し得ないことも、多くの人との繋がりがその可能性を広げていきます。このイベントは、私たちの仕事と直結しているだけでなく、まさに私たち一人ひとりが考え、いかに行動を起こすのかを問う機会も与えてくれております。それぞれの事業所において、地域との繋がりの重要性を認識し、様々な活動をなさっていることと思います。RUN伴もその一つとなり得るものだと考え、今後の更なる展開と、このイベントだけに終わらない様々な活動が全国で広がっていく事を信じ、自身も具体的に行動していけるようになりたいと思っております。



特定非営利活動法人

介護ホームどんぐりの家 荒川裕貴

「備えあれば憂いなし」「転ばぬ先の杖」などと昔から言いますが、最近の異常気象には中途半端な備えと杖ごときでは全く歯が立たないと思ってしまうくらい知らされています、それでも近年このような災害に対して私達なりに手は打ってはいるのですが、その上をゆく自然の猛威に、ただ怯えるだけかもしれません。皆様のところでは如何でしょうか？北海道もかなりの被害があったようで、被害にあわれた皆様には、心からお見舞いを申し上げます。さて、皆さん「セルフイメージ」という言葉はご存知でしょうか？自分で自分をどう評価しているか？自分で自分をどう思っているか？このセルフイメージが、皆さんの未来に影響を及ぼす物の一つだと思われます。この、セルフイメージには、イメージの高い人と低い人がおりますが、イメージの低い人の口癖とはどんなものか、よく言われているのは、

- 1.「でも」否定の言葉、言い訳の言葉、自分の可能性や相手の言葉を即シャットアウトする言葉。
- 2.「だって」否定の言葉、言い訳の言葉、自分を守るための言葉。
- 3.「どうせ」諦めの言葉、自分の可能性を潰してしまう言葉。
- 4.「知っている」知識の入り口を閉める言葉、周りからのアドバイスをシャットアウトする言葉。

基本的に、自分の殻に閉じこもるような、可能性や周りの人をシャットアウトするような、そんな感じの言葉が多いです。もし皆さんがそのような言葉を使っているなら要注意ですが・・・。

でもそんなに心配しなくても大丈夫です、それはセルフイメージは、変える事ができるからです。

まずは、これらの言葉をできるだけ使わないようにする事から始めてみましょう。皆さん心がけていきましょう。心がけは、習慣になり、習慣が変われば・・・。

道南ブロック 平山洋一

「オレンジカフェ」 小樽市 地域に理解と支援が広がる

会福祉法人ノマド福祉会では、小樽市初の認知症カフェを、5月と7月に、小樽サンモール一番街で開催しました。グループホームや認知症デイサービス、居宅介護支援事業所などのスタッフを中心に運営し、名前はオレンジカフェと名付けました。



認知症の方やご家族の方だけではなく、障がいのある方も、元気な方も、子どもたちも、みんなが集まる“共生カフェ”を目指したからです。「施設の敷居を低くして、地域の方たちと、行ったり来たりができる関係を築きたい！」「認知症や障がいは、誰にでも起こりうる身近なテーマであることを知ってほしい！」「子どもからお



年寄りまで、様々な人々が理解しあい、支えあう街作りに貢献したい！」という思いを込めました。①私たちが商店街に出向くことで、普段、認知症や介護のことに関心がない方に

も、関心を持っていただくきっかけを作ること。②あらためて相談をするという形式を壊して、「ちょっと、何かの

ついでに語る」というような、気軽に立ち寄ることができる場を作ること。③いかにも「福祉施設」というイメージを壊すため、かわいい！ほしい！と思ってもらえることができる雑貨を作ること。④おいしいスイーツを食べながら、「ちょこっと、おしゃべり」を目指すこと。⑤駄菓子屋やさりを織りを通して、高齢者と子どもたちとの交流を促進すること、などを大切にしながら運営しました。2回のカフェでは、買い物ついでにふらっと立ち寄って、立ち話で語ってくださる方もたくさんいて、「おしゃべりに花が咲く」理想的なカフェでした♪そして、「明日もやってるの？」という声に応えるべく、平日の「ひとりカフェ」も始めました。さをり織りの織り機を1台かつぎ、商店街での路上ライブです。土曜日のカフェとはまた客層が違い、一人なので話しかけやすいのか、たくさんの方が足を止めておしゃべりしていきま



す。さをり織りや雑貨たちをきっかけに、交流が生まれ、施設や介護を身近なものに感じる、イメージが変わる、そして、関心を持つ。地域に、「理解と支援」が広がります。

社会福祉法人ノマド福祉会 <http://www.nomad-haru.com>

さをり織りブログ <http://otaruharu.exblog.jp>

行方不明者捜索で思うこと 早急な対応が待たれる

滝川では年間5件程の捜索依頼が来ます。捜索に参加して今のままでは捜索に時間が掛かり夏季はまだしも冬季では死に至ってしまうとの思いを強くしてしまうのが現状です。先日の行方不明者は、6時前から行方不明になりSOSネットワークに連絡が入ったのが市役所の職員が来た8時40分、うちの事務員がパソコンを開いたのが8時55分、行方不明になってから約3時間が過ぎてからSOSネットワークの捜索が開始、10時5分市民の通報により発見、冬季間でなくて良かったと胸をなでおろす状況でした。今までSOSネットワークの行方不明者捜索に協力して思うことは、・パソコンのメールに頼っていても、金曜日の市役所閉庁後なら月曜日まで捜索依頼が来ない。メールは見ると解らない。・以前行方不明になっているなら何処で見つかったか、興味ある事は何か、何処に行きたがっていたか等、帰宅願望がある利用者様と関わっている我々にとっては当たり前の情報がない。

・誰が何処を捜索しているのか解らない為、同じ所を何人もの人が探している。今後こうなれば良いな～と思うこと
・オレンジプランもあるので、捜索に当たる人はオレンジ色の服を着たり、車にオレンジの色の捜索中の掲示物をしたりと捜索している人が識別でき情報交換が出来る体制にする。
・携帯などで登録でき行方不明者が出たら家族が自動配信できるシステム
・橋を一本渡れば隣町という現状もあるので、近隣市町村で情報の共有
この様な事は早急な整備が待たれるが、自治体にはお金が無くそこまで出来ないのも実情。
例えば、システム運用後の維持費は北海道で助成、システム運用までの費用は繰越金がいっぱいある団体が助成してくれたら良いのにとまで思ってしまう。
空知ブロック 高橋芳美